子どもに戦争体験を伝える二作品

――「戦争童話集」「星の牧場」――

中西靖忠

はじめに

―日本の戦争体験者たちが、僕たちの世代に語る「戦争」は人間の起こした戦争であるよりも、まるで飛行機や爆弾が、ひとりでに始めた戦争のようである。少々きつい言い方をすれば、〝物がなかった〟とか〝家が焼けた〟とかいった出来事ばかりであって、そうした悲惨な戦争が、どうして起こされたのか、敗戦は現在の日本の社会にどのような問題を残したのか、といった問題に一言もふれず、それどころか、そうした議論を「政治の話はやめよう……」などと避けてばかりいる――

50・8・12朝日新聞〝声〟　（受験生・18才）

大人は不誠実だとの若い世代の声が聞える。そして敗戦後の大人の変身のあざやかさ、生きるためとはいいながら、遮二無二、高度成長へ突っぱしってきた日本人、ご都会主義で反省を知らないといわれても仕方がない。それがことしは昭和五十年、敗戦から三十年たったということで、にわかに戦争を語りつがねばとか、戦争体験の風化だの、空洞化とかがいわれはじめた。その上、統計から戦争を知らない世代が全人口の六割を越えるというので衝撃を受けた形だ。

おとうさん、ききたいことあるんやけどな。

――スイトンて何や？

――それからなあ、空襲てどのくらいこわかった？

――なんで戦争が起こるのン？

「ぼんぼん」で大阪空襲の体験を書いた今江祥智（昭和七年―）が娘の冬子ちゃんから受けた質問だ。それが、特攻隊募集のときなど「希望者ッ、一歩前へ!!」といわれて、「お父さんはそのとき、どうしたん？」とたずねられると、どう答えるか。なぜ、戦争を防げなかったのか。中國や朝鮮の人たちに何をしたのか、などとなってくると、答えを求められる側の口は重くなる。もうごまかしのきかない時代に来ているのだけれど、大人たちは、いつごろ、どんなきっかけで、暗黒の時代になっていったのか、分っていないのだ。

ただ、いまいえることは事実こそ大切ということだ。眞実を歪めないように、個人によって受取り方も異っても自己の体験を忠実に記録

することが、後の世代のためのプレゼントになるだろう。

そうして集まった体験記を児童の理解度に応じて、どう与えるかは今後なお考えなければならない問題だ。児童の口に合うような料理の仕方、いつどの作品をのチャンスも大切だし、フルコースで味わってほしいものと思うからである。

そのような思いを持ちつつ、児童向けの戦争物語を書いた二人、戦争に参加した世代として庄野英二氏と戦争の被害者の世代の野坂昭如氏の作品を検討することにした。（以下すべて敬称略）

一部　〝愛〟に救われる野坂童話

一、忘られぬ焼跡の体験

野坂昭如は、自分のことをこんな風にいったことがある。

人一倍臆病で卑怯な男である。だから予兆を知る能力については自信がある。

ぼくは、かなりいんちきな男である。

ぼくは、一種の感情人間であって、まるで論理に弱い。

ぼくは、また、いっこうにパッとしないスキャンダルの主となる。…黒眼鏡でもって登場した以上(他人の怒りや悪口は)覚悟のご愛嬌と、思っているのだが。…けれども、一つだけ性根にあるのは、國家に対してかくあってほしいと、要求する気持で、…かくあるべきだと、國民の一人として、いいたいし、いいつづけるつもりである。

昭和四十四年（一九六九）に毎日新聞社から出た「新戦後派」の「焼け跡闇市派宣言」から拾った箇條である。

週刊誌風な横顔は昨年（一九七四）七月十九日号の週刊朝日の記事に出ている。

昭和三十七年の「プレイボーイ入門」にはじまり処女小説「エロ事師たち」に至る著述。黒メガネのイメージ。「女は人類ではない」とテレビでぶちあげた直後、宝塚女優だった暘子さんと結婚。そして、焼け跡の苦脳を描いた「火垂るの墓」で直木賞受賞。あとは「マリリンモンロー…」を歌う歌手、キックボクシング、ラクビーチームのスタンドオフ……。

そういう様々な顔をもつ野坂氏は、気がついてみたら、國会に出ようと、ということは、恥ずかしくも（？）政治家になろうとして、立候補し、小さな車で、街頭をぶって歩いていた。

この紹介はいかにも週刊誌風だ。参議院選挙に〝既成四政党の指定席〟といわれる東京地方区に立候補した時の記事だ。多才多芸で意表をつく行動でしばしばマスコミをにぎわせた有名人である。時に露悪的でうさん臭いと見られるところがあって、小野田寛郎氏との対談で天皇についての感想を求めて、黒メガネをかけているような人に答えるべき問題でないと手厳しく拒絶されたこともある。(注1) 毀譽褒貶というか、誤解されることも多い人なのだ。なお目下、雑誌「面白半分」の編集長時代の四十七年（一九七二）七月号に「四疊半襖の下張」を掲載して、〝わいせつ文書販布〟の疑いで、東京地裁で裁判中である。

また落選して〝事後運動の会〟を作るとか、埼玉県の大利根町に〝アドリブ農場〟を開設し、無農薬のコメ造りを試みるなど有言実行の人物である。

再び前記週刊朝日の記事

嘆き、つぶやくような独自調。話す中身も、陰々滅々たる〝終末教〟の教祖風だった。

「戦後の焼け跡では、食べものを求めて、人を殺すことさえできた。そんな時代で一番被害を受けたのは子どもだ。私は自分の手の中で、一歳四カ月の妹を餓死させた。日本の食糧自給率は四割。浮かれているうちに、いまに食糧がなくなり、公害がはびこり……それを阻止するためにも、國会に私だけの空間を持ちたい……」と。

このとき市川房枝、紀平悌子を応援していた有吉佐和子が、街頭の野坂を見ている。初日以後は「ほとんど彼一人がマイクを握って辻説法をしていた。流石に知名度が抜群で、どこでもノンポリ風の若者が黒山のように集っている。……野坂さんのポスターには、白地に墨で『二度と飢えた子供の顔を見たくない』と印刷してあった。(注2)」この選挙では五十二万七千余票の支持を得たが次点に止まった。石原慎太郎も野坂はどんな気なんだというぐらいで、週刊誌記者ばかりでなく、政界進出を意外と思う人も多かった。ましてや全國区ならともかく見込うすな東京地方区である。善戦したといえよう。

野坂は昭和五年（一九三〇）十月十日神奈川で生まれた。父相如、母笑子、生後一週間で実母を失う。作品を總合してみると母は病気で出産すれば死ぬと医師から警告されていたが、自分の生命と引替える覚悟で昭如を生んだらしい。そして間もなく神戸の張満谷善三の養子にやられた。神戸市立一中（いま葺合高校）生だった二十年六月五日の空襲で、養父母、祖母を失い、自分は奇跡的に助かる。よそに預けていた義妹の恵子をつれて十四才の少年昭如は空襲を避け歩き、焼け跡闇市派の辛酸を味わう。八月十五日は福井県の春江で迎えるが、その一週間後一年三カ月の恵子を餓死させてしまう。実父と再会するのは二年余後の二十二年十二月十七日、東京の少年院でのこと、実父は東大土木科を出ており、当時新潟県の副知事であった。

旧制新潟高校、早稲大文学部（仏文）は中退している。東門堂大栄寺に入山し修行したという。三十一年四月に三木雞郎のマネージャーになっている。このころからテレビ時代がはじまりコント、コラム、CMソングの大量生産を始める。肩書は作詞家、雑文業だ。CMの代表作は〝セクシー・ピンク〟〝カシミヤタッチ〟、三十八年には「オモチャのチャ　チャ　チャ」でレコード大賞（童謡作詞部門）を受けた。

四十二年（一九六七）主として小説を書きはじめ、「受胎旅行」が直木賞候補になり、翌年（一九六八）「アメリカひじき」「火垂るの墓」で第五十八回直木賞を受賞し、作家としての地位を確立したが、また歌手として四十四年デビュー、〝マリリンモンローノーリターン〟〝黒の船唄〟が代表歌だ。最近は文筆活動、対談、講演と活躍はまことに多彩でつぎつぎ出版されているが、昭和四十八年（一九七三）讀

賣新聞社発行の「死の器」巻末に添えられた村上玄一編の野坂昭如既刊目録によれば単行本四十七冊を數える。ほかに再録本十五冊、監修・共著などで奥付に名を録したのが六冊ということである。

この尨大な、しかもいまも増えつづけている作品集について、応接のいとまのない（書籍費のこともある）私には野坂文学を系統づけること容易なことでない。〝抒情作品集〟といった分け方があることを出版された書名で知ったが、未定稿の仮説ということで次のように分けてみたい。

一　戦争、敗戦、占領下という國家の重大事に少年の日に際會し、國家や大人が残した影響や責任を考えつづける系列。空襲が大きな要因であり「アメリカひじき」に代表される。

二　戦後の飢餓、混乱の狀態下にあって体当りで生きぬく、社会の底辺の風俗。焼け跡体験から生まれた「エロ事師」や「とむらい師」。

三　生残りの後めたさや実力者の庇護のもとにあって反省させられる人間のエゴや親子などのあり方追及。

四　昭和一ケタ世代の宿命のような憂國的心情から終末的危機の打開をはかる時事社会派的傾向。

……

倫落とか猥雑、あるいは無頼、あるいは虚無、逸脱といった反社会的行動の根元まで辿ってゆく。同じ〝子殺し〟にも「死児を育てる」「死にても吾子」、あるいは一家心中に解決を求めた大場助教授の場合などの考察に野坂は、その事件の背景を執拗に追求し、社会の病弊を摘出してやまない。そしてその原点になるのが敗戦の体験だ。

虐殺だったとする米軍による空襲の実感、さらに戦後の飢餓に愛する妹の幼児を殺したという自責は、野坂が終生背負う十字架であり、同じく飢餓を体験した他の昭和一ケタ世代とも異る点である。

妹恵子を死に至らしめた事情は小説「火垂るの墓」にくわしく、またそのとおり事実であったろうから紹介はしないが、「新戦後派」の中で次のように語っている。(注3)

「ぼくは、恵子を愛していたと自信もっていえるが、食欲の前には、すべての愛も、やさしさも色を失った。……あの昭和二十年の夏、十四才の少年が、一年三カ月の赤ん坊を、育てられなかったからといって、別に気にやむことはないだろう。恵子の運がわるかったといえばそれまでだが、しかし一年三カ月の赤ん坊の食物のピンをはね、その頭をブンなぐった記憶はなくなるものではない。泣きっぱなしで死んでしまった女の子なんて、あまりにかわいそうすぎる。ぼくは恵子のことを考えると、どうにもならなくなってしまうのだ。」

この気持は中國東北地区を流浪した北満などの親たちにも通じる。子捨て、子殺しをやむなくさせられた。野坂少年ばかりでない。多くの人々が同じ体験をもっている。だから現在の彼は「いささか度を過ごした親馬鹿」(注4)となっている。そして彼は自分の娘にだけでなく、日本の子供全部にやさしいといえる。彼の一見荒々しい生活を描いた他の作品にまで、深知れぬやさしさが、センチメンタリズムがにじむ。

そうした野坂が、終戦三十年たって出した「戦争童話集」なのだ。

二、すべて〝八月十五日〟で始まる童話

「戦争童話集」は昭和五十年七月十五日、中央公論社から発行された。「昭和二十年八月十五日」で書き出される十二篇をまとめた單行本である。はじめ、多芸多才の行動的なこの作家が、童話にまで進出したのかと驚きの気持で手に取ったのだが、結論を先にいえば、野坂が黒メガネを取って素顔をみせたという印象だった。〝童話〟と名付け子供に語りかける以上、〝黒メガネ〟なんて通用しないのは当然のことなのだが、やさしい素直な野坂になって、十一才になるはずの長女麻央ちゃんに静かに語りかける父の姿が浮んだものである。

十二篇は次のような内容である。

1小さい潜水艦に恋をしたでかすぎるクジラの話

伊豆七島の南々東の海に大きくなりすぎたイワシクジラが孤独をもてあましていた。日本の潜水艦を仲間と錯覚してつきまとい、米國の艦艇の爆雷攻撃の身代りとなって四散する。それによって終戦後も体当り攻撃をしようとしていた潜水艦は「無駄な殺し合い」をやめようと思いとどまる。

2青いオウムと痩せた男の子の話

二五〇㌔爆弾で死んだ母を焼け跡の暗い防空壕で半月も待つ少年、比島沖で戦死した船員だった父のみやげのオウムが気づかわしげに少年に語りかける。「ダイジョウブ」オウムにくりかえし教えられて、ショックで忘れてしまっていた言葉をやっと思い出したとき、母が死んだことを悟り、少年も飢えて死ぬときだった。オウムも三日後に死ぬ。

3干からびた象と象使いの話

猛獣処分令で動物園の猛獣を殺すことになった。象を殺しかねた象使いが、六甲山中に逃れて生きのびようと努力するが、飢えて死ぬ。死期を知る象は象使いの死体を背中に乗せ、ひょろひょろ山中に消えてゆく。

4凧になったお母さん

住宅地への焼夷弾攻撃で逃げ遅れた母と子、五つのカツちゃんを焼けた空気から護るために砂のない砂場に伏せ、胸の汗で、乳房をもみしだいて乳をしぼり、水分を与える。やがては血まで―、やっと生残った幼児は干もののようにぺったんこになって空に吸われ熱風に天女のように舞いあがる母を見た。そのまゝ老人のように痩せ衰えたカツちゃんが、空からもどってくると母を待っている。「カツちゃんも痩せおとろえ、風に吹かれて空に舞いあがる。」「お母さんが迎えに来てくれたのです。まるで二つの凧のように、お母さんとカツちゃんは、真夏の太陽の輝く空いっぱいに、はばたき舞いおどりながら、どんど

ん高く昇っていきました。焼跡をはるか下に見おろして。」

5年老いた雌狼と女の子の話

満州を北から南へ避難する開拓団の女と子供、ハシカにかかった四才の女児が置き去られる。群から離れたおばあさん狼に出会う。飼犬と区別のつかぬ幼児に、狼は母性感情をもち、奇妙な逃避行がはじまるが、発見されて狼は子供をさらったとして射たれる。

6赤とんぼと、あぶら虫

特攻にかりたてられる十八才の少年航空兵、それも赤とんぼと呼ばれる初級練習機でだ。甘えのまだ残る少年は「お袋を守る」気持だった。二度の不成功のあと三度目の南へ発進する。少年はマッチ箱に油虫をいれてつれてゆく。少年に特攻の気負いはなく、「お前だけが友達だ」など話しかけているうち、いっしか編隊からはぐれて小島に不時着する。「犬死するならせめて油虫は生かしてやりたい。」やさしい気持の少年兵はまっすぐ沖へ泳ぎ出してゆく。戦線離脱の軍律が身についた少年は当然のように。

7ソルジャーズ・ファミリー

米軍にも無視された太平洋上の小島、飢えて日本兵はつぎつぎ死んだ。いちばん若い孤児の兵士は飢えという敵には気持の定めようがない。日本の土の上で死にたいと願う兵士は〝冒険ダン吉〟や〝空飛ぶ潜水艦〟の昔讀んだ物語を夢みながら息絶える。頭を日本の方角に向け、まるでお腹の中の赤ちゃんのように身をまるめた姿で——

8ぼくの防空壕

出征する前に父が掘った防空壕がある。父は戦死したが、壕に入ると少年は父と一緒にいる感じがわく。汗の匂いまではっきり感じとれる場所だった。父と共に闘う戦争ごっこ、空想で父と対話を交す場だった。母はそんなこととは思いもかけず、戦争が終って、手荒く埋めてしまう。

9八月の風船

戦争末期〝風船爆弾〟が勤労学生の手で作られた。昭和十九年春二千個が空に放たれた。一割が米本土に届いたというが、報道管制のため戦果がわが國に伝わらず、兵器として頼りならないとして、作っただけの徒労に終った。八月十五日従事した学生らが、使われなかった風船をあわれんで、つぎつぎ自らの息を吹きこんでふくらませ大空に放つ。やるせない終戦風景だが、風船は「能なしだけれど、とてもやさしい印象でした。」

10馬と兵士

本土上陸に備える部隊のいる町に空襲があって厩が直撃される。傷き逃げ出した馬を救おうと農村出身の若い兵が追ってゆく。かねがね酷使される馬を憐んでいたが、馬は遠く逃げて池のほとりで死んだ。

結局敵前逃亡罪になるのだと思いこんでいた兵は、「早く馬の後を追わないと、また馬にきらわれてしまう」と自決する。

11捕虜と女の子

神戸の空襲で孤児になった女児が、山裾の壕深くひそむアメリカ兵の捕虜と出会う。「ママ」と呼ぶ幼女と捕虜は意味も心も通じあう。終戦の日、幼女から捕虜のことを知った市民はアメリカ兵を救出しようとするが、立場が逆になったことを知らない米兵は恐れをなし、山へ逃げこんで行方不明となる。

12焼跡の、お菓子の木

焼跡のお屋敷内に一本の木が焼残っていた。それは食糧のないとき、病弱の子のために、母がバウムクーヘンを手に入れてたべさせた残りをその子が埋めたのが芽ぶいたお菓子の木だった。ママは空襲で、またその子も壕の中で死に、お菓子の木だけそそり立っている。「昭和二十年、八月十五日、大人たちが起こした戦争が、ようやく終わって、日本中、焼跡だらけとなり、誰もが、お腹を減らしている時に、一本だけ、お菓子の木が、生えていたのです。お菓子の木には、いつも子供が鈴なりになって、葉っぱや枝をむしゃむしゃと、おいしそうに食べ、しかも大人たちは、すぐそばを通りながら、まったくこの木には気がつきませんでした。」

	舞台	登場者	結末
1	太平洋　海軍	クジラ 潜水艦	爆雷で死 特攻を止める
2	防空壕　市民	少年 オウム	餓死
3	山中　動物	象使い 象	餓死
4	住宅地の焼跡 市民	母 少年（5才）	焼死 餓死
5	満洲　避難民	幼女（4才） 老いた狼	病死 射殺
6	南方の小島 少年航空兵	少年兵（18才） 油虫	自決
7	南方の小島　陸軍	漁師出身の若い兵	餓死
8	防空壕　市民	少年（三年生） 母	生残って母子家庭
9	山中の工場 勤労学徒	学生たち	徒労
10	海岸近い内地 軍馬	逃亡兵 軍馬	自決 被爆死
11	山裾の防空壕 捕虜	米軍捕虜 幼女	行方不明
12	屋敷の焼跡	母と少年 子供たち	爆死と餓死のあと あり余るお菓子

第一話は波にものうく漂うクジラの見聞として日本軍が北へ北へ追いあげられていった戦争末期の戦勢を概観して、昭和二十年ごろの大勢を伝える。第十二話は大人たちが起した戦争が終った。みんなが飢餓状態がある。子どもがいちばんの犠牲者だ。その大人が気づかぬ、お菓子の木をむしゃむしゃと食べる喜び――空想なのだが、はかないけれど子どもたちの割りきれぬ反抗の気持で結んでいる。さだめし野坂少年の実感だったのだろう。

表で見るように場所は内地はもとより太平洋、満州、南方に広がり、登場する人たちも銃後の母子をはじめ少年兵、開拓団、米軍捕虜のほか軍馬や動物にまで及んでいる。いかにも幅広く、出来るかぎり多方面にわたって今回の戦争にかかわた年少の人のことを伝えようとしている。作者が体験した苛酷な空襲ばかりではないのである。

例えば飢え――

「ぼくの童話には、やたらと痩せた動物や人間が登場しますが、戦争の頃を舞台にする以上いたしかたのないことで――」と前口上して、配給制度を説明する。「一日に米二合三勺、二十年以降は二合一勺と決められ、それもお米だけではなく、本来は……」（第三話、三九頁）

「まったく、昭和二十年頃に、五才から十才くらいだった子供ほど、みじめな存在はなかった。だって、もの心ついた頃には、もう甘いものがなくなり……中略……子供たちには、（大人の）そういう思い出さえもない。昭和十六年にお米が配給制度になり、お砂糖も自由に買えなくなり、それまで巷にあふれていたお菓子や飴は、たちまちどこかへ消え失せ、最後に残った甘いものといえば、乾燥芋と乾しバナナでした。」（第十二話、一八五頁）

「年は五才なんですが、その表情は老人のようにしぼんで、……いや（お腹の）減りすぎた子供の表情というものは、人種の別なく同じであって……つまり、眼ばかり大きく見開き、しかも何も見えていないように、瞳は動かず、口許は、顔の皮膚をそこにたくしこんだ如くしわが寄り、全体に逆三角形をしているのです。」（第四話、五五頁）

「お腹が減っていると、いろんなことを、夢ともうつつともなく考えます。もちろん食物のことで、不思議に、たいへんな御馳走は出てこず、もっとささやかなもの、例えば…」（第七話、一〇六頁）

また捕虜について

「当時の日本の軍隊は、捕虜について、他の國と少しかわった考え方をしていました。『生きて虜囚のはずかしめを受くるなかれ』と、兵士に教え、敵につかまるなど、本人だけではなく、家族や親戚にまで、恥をかかせることだと、みなされていたのです。――中略――明治になって以後、貧しい島國である日本が、世界の列強と立ちまじり、競争して行く上で、兵士に強制したことです。自分だけではなく、親や子供まで世間に顔向けできなくなると思えば、命を惜しんでなどいられない。負けと分った戦でも、死ぬために突撃していき、その、気迫で、少ない兵力、貧しい武器を補おうというわけです。」（第十一話一七〇頁）

という解説が付く。特攻という言葉や学徒動員や敵前逃亡などの用語

についても同様である。

燈火管制とはどういうことかいまの児童には分るまい。ましてや「戦争中の夜の町は、本当にまっくらで、手探りしなければ歩けないほどでした。」（第八話、一二〇頁）にも、防空壕、あるいは退避壕にも説明が必要だ。野坂はそれを親切にしている。日本は、最後になると、いろいろ不思議なことをした。ヒマを家庭菜園に植えさせたこと（第二話、ヒマワリになっているが、ヒマの誤解ではないか）「いよいよアメリカ軍が、内地に上陸するだろうと、考えられた時、これを撃退させるため、竹槍、弓、火なわ銃、吹矢、十手まで、かき集めました。」（第九話、一三九頁）「ろくに鉄砲もなく、服装はちぐはぐだし、とてもまともに戦争など出来る状態ではありませんでした。毎日何をしていたかというと、海岸で穴を掘り、あるいは、山に入って松の根っこを運び出す作業。穴は、敵が上陸して来た時、兵士が一人ずつこれに入って、その上を通り過ぎる戦車に、火薬のついた棒を、突き出すのです。――中略――松根油をガソリンに混ぜると、オクタン価が高くなって、飛行機が早くとぶのだそうです。なんともはや、情けない話ですが、兵士たちは、みな必勝の信念にもえて、一生懸命働いていました。」（第十話、一五三頁）「防空頭巾にもんぺ姿、片手にバケツをさげたママ」（第十二話、一九四頁）せっぱつまった敗戦前の様子が、如実に思い出されてくる。空襲のとき焼夷弾にとりまかれ、熱風にあふれる描寫は実際に、その地獄を体験しているだけに、すさまじい。

「空気が段々と熱くなる具合が、吸う息でさえ感じられ、木立ちの葉一枚一枚悲鳴を上げるように、ふるえる」「シューツと湯気の吹き出す音がして、見ると、一軒の二階家の、軒下や窓から、煙とはちがう蒸気のようなものが吐き出され、それははじめてみる不思議ながめでした」（第四話、五九頁）その場にいた者でないとわからない凄惨な状景で、お母さんが凧のように、炎上の後の空に吸われることも無理なく受入れられる。悲惨を突き抜け白晝夢のような二つの凧の幻想の結びは哀切である。

以上のように、太平洋戦争末期の全貌を多角的にとらえて、しかも正確に伝えようと作者は意図している。この本のいわゆる〝腰巻き〟の宣伝言葉「戦争を忘れた大人達、戦争を知らない若者達、そして何も知らない子供達――に捧げる――」は、まったくぴったりした言葉といえる。

さらに、ここには英雄も職業軍人も出てこない。唯一の攻撃を仕掛けてゆく少年航空兵の話である第六話にしても、敵の姿を見つけることもなく、花々しいところはない。幼くて命により死地に赴く、少年の心情をうたいあげる。「飛行機に爆弾を積んで、敵艦に体当りする特攻隊も、まだしも颯爽としています。特攻隊のことだけが、華やかにとり上げられ、美しく語られているけれど、もっとすくわれない形で、さらに勇気を必要とする戦死をとげた兵士が、沢山いるのです」（第十話、一五三頁）というように、無名の兵士への思いやりである。戦前からの教育で思いこまされたまま、八月十五日を知らなかったば

かりに、死ななくてよい死を選んだ兵士がいる。ましてや父を戦地に送った銃後の母子家庭で空襲を受け、母が爆死した場合の幼児、これまた戦いの意志も意識もない、無心のものに訪れる戦争の死である。さらに動物やペットは、人間以上に戦争にかかわりがない。動物園の象であり、少年の飼うオウムである。これらも死んでゆく。みんなが死ぬ話ばかり、学生が作った風船爆弾までも「こうなってみると死体のように見える」（第九話一四六頁）のだ。報いられるもの一つもなく、みんな一心に努力しながら納得させることなく訪れる死、むなしさしか残らない戦争である。一般の平凡な無力な市民、心やさしい人も無心の生きものをも、巻きこんで一様に皆殺しにする戦争に焦点をあわせて、鮮烈に印象づける童話集である。

この残酷で惨烈な物語で、ほっとするというか、救いがあるというのは、一貫して〝愛〟がテーマにあるからだろう。童話であることの一つの要件は、愛情の文学だと思うのだが、野坂は「凧になったお母さん」で身を捨てて子供を護ろうとする母性愛の姿を力をこめて描いている。そして母性愛は、第五話、第十二話にも意識されており、第五話の恐しい狼ですら、無心の幼女に対して母性的感情をもつものとして取りあげられる。一方逆に母を憶う少年の思いを美しく描くのは第六話の少年航空兵である。

また動物と人間の心の通いあいを描くのは第三話「干からびた象と象使い」。傷ついた馬を気づかって兵営を離れた兵士と馬の第十話や満州の雌狼の第五話など。わけても油虫をもいとおしむ気持になってゆく、幼い少年特攻兵の心情に立入った第六話「赤とんぼ、あぶら虫」はやさしくて純粋で、無垢な少年の心の美しい話である。また父の南方みやげのおうむのため、餌さがしに懸命になる少年、爆撃を受けたあとショックで、言葉を忘れてしまって、防空壕で母を待つ第二話「青いオウムと痩せた男の子の話」で、オウムが少年を気づかい、心配し、励まそうと、しきりにしゃべりかけるところなど涙ぐましい場面である。

野坂がこれだけ純粋な形で〝愛〟を語りかけた作品があったであろうか。また野坂調といわれる、てにをはを略した文体でもない。素直な文章である。いまなお野坂は黒メガネをはずしてはいない。愛をまつこうから語るには、いまなおテレるのであろう。童話の世界は、それでは通用しないことは作者自身が承知しているうえでの、童話集の出版である。〝野坂童話〟の誕生は意義が深いとみなければならない。

三、昭和一ケタの複雑な思い

私はこの夏、十五才になる男の高校一年生にこの本を預けていた。どう受けとるか聞いてみたかった。

「非現実的で、わからないし、興味もてないよ」ということである。それでも何か印象に残った話はと聞くと「八月の風船」だという。努力が報いられなかった学生とその作りあげられた風船、そしてみんなで息を吹きこんで空に放っ、双方の寂しさがわかるというのである。

私は昭和二十年八月十五日、この作者は君と同じ年頃の少年で、赤ちゃんと二人だけ生き残って苦労したんだ。君のお父さんとも同じ年ごろじゃないかなと解説すると初めて顔色が動いて、興味を示した。傍のその母なる人は「アラ、野坂さんて、そんな人でしたの」と認識を改めたようである。

その母は小学校二年ぐらいで、広島の福山の空襲を山越しに見たという。父なる人は野坂と同年、大阪で被災している。しかしそのころの昔話は家庭では一度も出たことがないという。

「いやなことは思い出さないのがいちばんよ。毎年、夏になると戦記ものとか、やれ終戦の思い出とかって出るでしょ、いやな気がするわ、そりゃ私だって母におぶされて防空壕へ入ったこと覚えてるし、スイトン食べた経験もあるわよ、だけどいつまでたっても、昔の戦争ほじくり出して、八月十五日の記憶をあらたになんて、いやね。苦しかったことを自慢してるみたい。」という「アメリカひじき」の京子のような考え方が一般なのだ。

空襲を地震や風水害と同じ天変地変として受けとめ、すべて運命とあきらめる考え方がある。この考え方を野坂は〝すりかえだ、ごまかしだ〟と感じ、その考えを否定するのに、もどかしい思いをしている。

野坂の空襲体験から得たものは複雑だ。

爆撃がはじまるまで、「少くともぼくには、憎しみより憧れの気持が強かったように思う。」それほど天上のB29は、あまりにも美しく、一種の崇高さをさえ感じさせた。それから後の、まことに無残な地獄絵図、焼夷弾に串刺しにされた赤ん坊、両脚を吹きとばされた子供の、息引きとる最後のまたたきも眼にした。これが、人間の直接手を下す地上戦なり、もしくはかなわぬまでも応戦できる鉄砲でももっていたら敵愾心、人間と人間の戦闘という意識が生まれたのではないか。しかし逃げまどうだけでは、これは空襲ってもんじゃない、とてつもない天変地異なのだ、死んだ子供は運が悪かったんだと思うほかない。B29が毒々しい迷彩でも加えていたら、また異る意識をもったかも…など、といっている。(注5) 広島や長崎の体験だったら野坂の考えはまた別のものになっていたろう。

「鬼畜米兵うちてしやまむにこりかたまっていた軍國児童」(「私の中の日本人」)だった野坂には割りきれない思いで考えつづける。神戸の爆撃跡は廃墟ともいえない焼野原、自然にもどってしまった。「無より生じて無に帰るといった感じ」となる無常観、また後進國としての劣等感も左右したともいう。もしあの空襲が、アメリカによってでなく、中國、朝鮮のもたらしたものだったら、同じ飛行機であっても、美しいとは見なかっただろうとも、こうつきつめて考えて行くのが野坂である。教えられ、信じていたものを一挙に破壊し裏切った八月十五日。この世代のもつ悲しさであろう。「これだけのことをしでかしておきながら、すべては他人ごと、過ぎたこと、それ以上考えないで、あっけらかんとしている大人たち」を、野坂は日本人はつくづく不思議な人種と思うのだ。(注6)

もう一度、彼の育った時代を彼の言葉(「焼け跡闇市派宣言」)で、

ふり返ってみると

「ぼくは生れたほぼ一年後に、満州事変が起こり、小学校へ入学した年に支那事変が起こり、小学校が國民学校とかわった年に、太平洋戦争が起こり、中学三年の時、日本は敗けた。ぼくより三年上の方たちは、戦争で死ぬことができたし、三年下の方ならば、まず空襲を知らないはずである。そして三年上の方ならば、ある程度、戦争について肯定するにしろ、否定するにしろ、自分の考えというものを、お持ちであったらしい。三年下の方は、敗戦の時が小学校六年生だから、文字どおり銃後の少國民、兵隊さんよありがとうと唄ってはいても、軍隊とか戦争についての認識は、まるでなかったろうと思う。

ぼくは、日本は神國であり、東洋の盟主、いや世界に八紘一宇の精神をもって臨む指導的國家、その軍隊は忠勇無比にして、敗け戦をしらず、文字どおりの皇軍であると、学校だけをいっても九年間教えこまれ、天孫降臨を頭では否定しながら、気持の上ではむりやり信じこむような、一方で絶対的な軍國少年であるくせに、たとえば、兵士が強行軍の途中、日射病で落伍し、虫ピンに刺された黄金虫のように、くるくるまわりながら泡を吹き、誰も介抱しないのをみて、また、級友の父親が召集受けたその半年後には骨となってもどるのをみて、漠然とした不安感、嫌悪感をいだき、だが、それは決して、戦争を憎んだり軍隊を拒否する確固たる気持にはいたらない。昭三、四、五、六、七年生まれの人たちに共通することは、戦争体験一つとりあげても、えらく中途半端な感じのあることだ。男女共学も無縁の学制改革期だったし、教練、勤労奉仕が主で、英語など敵性語といわれて学ばず、スポーツの面でもチャンスを失したなど述べて

なにかを地道に学ぼうという意欲が、そもそも薄いように思える。それは戦時中の動員、戦後の混乱の中で、まともに机に向かう習慣を身につけなかったからかも知れず、あるいは教育なんて、時代がかわれば、白を黒といいまるめるものなんだという、不信感が骨がらみになっているとも考えられるのだが。

さらに

ぼくの、あやふやな仮説に過ぎないのだけれど、このように四、五、六年生まれは、他の世代と比べて、共通する点が多い半面、またこんなに、青年になるまでの経験の多様な世代はないだろう。父親の出征した家と、そうでない家、さらに戦死した場合、家を空襲で焼かれた者、焼け残った者、都会にいて、ひたすら腹を減らした者、たらふく食べられた者、海外から引き揚げた者の中でも、時期と場所で異なるし、戦争で瓦解した家庭、栄えた家庭、勤労動員の経験の有無、焼跡で焼死体をみた者、みなかった者、兄弟の多い少ないということだって、少年多感なりし頃の気持に、ずいぶんちがった影響を与えた。

十歳くらいから十五、六歳まで、いわば人間の精神形成期に、もっとも重大な関わり合いを持つと思われる環境の上で、この世代ほ

ど、差のはげしい例は他にないと思われる。たとえば、一朝明ければ、地平の彼方まで続く広漠たる焼跡をながめた者と、かすかに夜空染める焔の色に、空襲を想像していた者とは、いくら同じように腹を減らしていてもちがうし、その焼跡も直接、焼夷弾を受けて、焼死体のごろごろしている風景と、類焼で死体のないながめは、雲泥の差があるのだ。

という。野坂が一般の多くの人たちに理解されるということは、もちろん無理な話だ。彼が自分の育ちについて右のように語るときなるほど、そうだと思う。他人の理解といい評価というもの、絶対のものはなくてやはり自分の体験や育ちの尺度をもっているのだ。だから一方には彼の心酔者も多い。彼が右の保守も左革新もけっとばして、己の疑念を抱いた事柄の核心に迫ろうとするひたむきな姿に心打たれるのだ。ごまかしをきらう精神は昭和一ケタ独得の精神である。それより上の年代は、ごまかし、まやかしに不感症だ。それは戦後の政治をみればよくわかる。しかも、その年代が牛耳る社会のカベは厚い。そして彼らが指導する社会が公害に汚され、頽廃と無気力に流されるのに任してゆくと、終末観に立たざるを得なくなる。もう一度野坂の少年時代の教育を思い出し、その十四才の八月十五日が突如訪れたときのショックを考えてみると「だまされた。もうだまされぬぞ」の憤りと悔しさであろう。なぜ終戦の詔勅が、空襲を受ける前の六月一日に出なかったのかと繰言となる。[注7]それが世の汚れも仕組みも知らぬ少年に、強烈に烙きついている。それを片時も忘れず、持續しているのが野坂といえる。戦争体験を伝えることは、悲惨な被害の体験を伝えるだけで終るものでなく、そこから始まるのである。どうして戦争が起り、どう國民が対処したか、歴史的な日本人の意識の解明をとおして彼の探究はすすんでいるようだ。國の現状をどう発展させて平和を守るかも、後世を俟たねばならぬ。教育が大事なこと、そしてどう正しく伝えるかが、大きな課題であるとき、野坂の童話第一作が出現したことは、大きな収穫であった。

この本が出来たとき野坂は時事通信の記者に含羞の面持でこう語った。[注8]

「母性愛を信じているわけではないのに、戦争を考えると母や子供が出てくるのは、僕に幼児性があるからかもしれませんね。動物が出てくるのも動物に託して人間のあるべき純粋な姿を信じようとするからかもしれませんが、それによって邪念を排除しようとするのはやっぱり僕の一種の幼児性の現れでしょうな」幼児性など持出すのでは、まだ黒メガネを脱せない、いい分である。「戦争というのは子供と年寄りと動物がいちばんひどい目に会う」のである。照れ屋の野坂だから、言葉どおり受取ることはあるまい。次の作品を期待するわけである。

注

(1) サンデー毎日50・8・10「石原慎太郎のブラジル会見記・小野田さんがはじめて天皇に言及」

(2) 有吉佐和子　「複合汚染」　50・4・20上巻　四九頁

(3) 野坂昭如 「新戦後派」 44・3・10 五九頁
(4) 同 同 同 五一頁
(5) 野坂昭如 「いまも日々空襲をうけている」 50・9・21 現代史出版会 「賣舌流転」 一〇六―七頁
(6) 同右 一〇九頁
(7) 同右 「六月一日に終わっていれば」 48・4・10 「修羅の思想」 一九六頁
(8) 時事通信 「著者に聞く」 50・8・6

二部 戦争と係りあう「星の牧場」

一、もっともファンタジックな貌で

庄野英二の文庫本「ロッテルダムの灯」をぱらぱらみていると、満洲へ開拓団として渡った友人Fの話がでている。

言語に絶する悲劇にたえてきたような悲痛な感じや深刻さは少しもなかった。それよりも驚いたのは、農業にはこりているはずだと思ったのに「―君、信州の田舎の谷間で古い水車小屋でも家にして一緒にみつばちを飼わないか。そばの花ではよい蜜はとれないが、飼えないこともないよ。

「そばの花」と題された随想だから、「星の牧場」のモミイチが出会ったハチカイのような生活を念願するFさんは実在する人だろう。おしでつんぼで兵役に関係なかった。太平洋戦争が始まってキリスト教開拓団に加わったと聞いて、庄野は戦争に参加できないので、周囲の重圧に抗しきれなかったのかと、ふびんでならない思いを抱いていた。しかしFさんは、ロマノフカのような、大地に汗を落すほんとうの人間らしい生き方を求めた、という積極的な気持を知って驚いた。またクリスチャンばかりの開拓団なのに、憎しみあい、じゃけんな争いの連續であり、身障者のFさんは一人のけものになっていた。それが幸いだったの述懐を聞いた。ここにも記憶喪失のモミイチ像に通じるものがある。さらにモミイチの誕生は「ロッテルダムの灯」巻頭の朝鮮動乱で負傷した白人兵との出会いがもとであろう。

庄野という人のファンタジーは現実に体験したことの発展で、根拠があり、信用できる童話作りをめざす人だと思う。ちょっぴり茶目っ気を出して、地図にない島や図鑑にない花を創造するが、それなりの理由があるようだ。態度は眞摯で誠実そのものだと思う。

例をもうひとつあげると軍馬のことを昭和二十三年に童話「朝風のはなし」に書き、昭和二十九年には随筆「松花江」で北満で再会した馬を書いている。馬は川が渡れなくて流氷に乗ったまゝ流されてゆく。「流氷のオルゴールの音楽の彼方から、ハナジロのいななく声が聞えたよう」と結んでいる。勿論夢をみたのだが、「夢には色彩がないというのは、とんでもない間違いです。私の夢は天然色だったのです。」と念を押している。モミイチの最後にツキスミと出会う場面も、この夢を根拠にして成立しているのだ。

そのほかジプシーの生活のあり方は、後に述べるが、作者がほとん

ど体験したものばかり、眞似も容易だ。Fさんの理想――「乳牛とみつばちがふえ、土作りの家の中には、やがてしらかばのテーブルと腰かけが備わり、…子供はバラライカを鳴らし、妻は編物、主人はプーシュキンの詩を讀む」素朴で平和な暮しの建設を教えたFがあり、英二が賛成し、さらに讃歌として歌いあげて、子供たちが、このような生活をしたら幸福であろうと思い、子供たちが自主性を働かしさえすれば実現は可能だ。実現への原動力にしようと願っているところに「星の牧場」の本質があると思うのである。「星の牧場」を戦争児童物語と見ることは、庄野は不本意かも知れない。だが児童文学者といわれる人で、今次大戦にどれだけの人が軍人として深い体験をもったか何かを書き残したかという点では庄野以外にはあげられないだろう。その点では諒解を得られるだろう。

庄野英二の「星の牧場」は昭和三十八年十一月理論社から出版された。十二年も前のことになるが、作者は当時四十八才であった。

大阪で教師をしている英二は毎年夏休みになると信州で過ごすことを習慣にしていた。前年の夏八月から浅間山南麓・御代田、井幹屋で執筆を始め大阪に帰って書きついた。「実際には約八カ月かかったが書きはじめるまでの期間はもっと長かった」とあとがきでいっている。この年の七月には油絵の第一回個展を開いたし、前年の三十六年に私家版で出した「ロッテルダムの灯」が、日本エッセイストクラブ賞を受賞した。最も充実した時代だったようだ。

「星の牧場」は三十九年四月、第四回日本児童文学者協会賞、五月に第十一回サンケイ児童出版文化賞、十一月には第二回野間文芸賞と相ついで受賞した。

さらに講談社文庫本「ロッテルダムの灯」に載る作者自筆の年譜によれば、昭和四十三年劇団民芸が劇化、上演した。脚色小山祐士、演出若杉光夫、主役内藤武敏で、東京、関東、関西を半年間にわたって巡演した。民芸は四十六年にも一月から秋にかけて全國を巡演、このとき、主役「モミイチ」を宇野重吉が演じている。

バレー化は四十五年八月、札幌バレー団が上演。四十六年には高木史郎の脚色演出でミュージカルになり、宝塚歌劇団が上演した。「モミイチ」は鳳蘭であった。ラジオでの朗読やドラマなどにも登場している。

〝仕合わせ〟な作品という、わだ・としおは「作者が好き勝手なことを書きながら、しかも生命感に溢れた自然や愛や自由や喜こびの意味を幻想の中に鮮かに定着して〝コドモ〟原理の讃歌となった」と評価する作品である。(注1) 一方児童文学ではないと疑問を持ちつづける鳥越信のような人もいる。郷愁の文学であり、本質的に大人の文学だというのだが、(注2) 私はそんなこだわりを持たない。庄野英二の文学のそれまでの集大成であり、原点とも思っている。それに今回は作品に投影している戦争体験をさぐり、英二が何を次代に訴えたいかという点――作品論として全体に照明を当てるより、限られた角度から見ようと思っているからでもある。

そこでまず物語の大筋を書きとめよう。

戦争で記憶を失った青年モミイチが、故郷の牧場に帰ってくる。幻聴の症状もあって愛馬ツキスミの蹄の音を聞く。ある日幻聴に誘われツキスミを求めて山の奥深くへ行く。そこは花畑に圍まれた別天地で、音楽と平和を愛し自由に暮しているジプシーたちに会う。心の温い人たちばかり、モミイチは羨しい暮しと思うが、牧場の人たちにも心配はかけたくない。いったん牧場にもどる。

楽しみにしていた満月の夜のジプシーたちのお祭り、バザールに行くことはできなかった。秋が来てふたたび山に入ったとき、山はすっかり様子を変えており、どこを探してもジプシーの姿はなかった。キキョウの原に横たわって星夜を見ているうちに、目の前に數百人のオーケストラが現われて演奏する。楽の音に乗って幻の馬ツキスミが現われ、モミイチを乗せて天空をかけまわった。モミイチはあくる日になっても夢か現実だったか、はっきりしなかった。

英二は絹製一人用野営道具をもって西ヨーロッパ、中近東など廻ったが、出発に当って「日本の童話は空想力の貧困で行詰っています。子供の夢をみたす文学が日本の風土では生れにくいと感じて私はもっと光の強い國々を訪ねたい」と新聞記者に語った。（27・7・10、毎日新聞）そうした抱負の実った壮大な幻想的なメルヘンといえる。

この物語の主題は戦争で、もっとも心に痛手を受けた兵士、記憶喪失症になった心やさしい兵士の戦後社会での生き方を辿ったものと思う。これは作者の深層にあるもので、表現は象徴的である。作者自身がどこまで意図して構成したかは不明である。昭和二十七年（一九五二）ヨーロッパ旅行への機上で、朝鮮動乱で記憶喪失症になった白人兵士に出会ったことで触発されたことは疑いがない。このショックは七年後に随想「ロッテルダムの灯」になり、さらに四年後「星の牧場」の主人公となって児童の前に現われる。モミイチを戦争のショックによる記憶喪失症にしたことには深い意味がある。

戦争の恐しさはこうした病気が起ることで察しなければいけない。むしろ頭がおかしくなる方が普通の神経をもった人間なのだ。白人の負傷兵は「朝鮮における戦闘のことも、又どのようにして朝鮮へ行ったかも全然記憶を失っていて思い出せない……『私が最後にたったひとつだけ覚えていることは、軍用船の甲板の上からロッテルダムの港の灯を眺めたことです』といった。」という。さらに作者にとって都合がいいと思えることは戦争の禍々しい絶叫や凄絶な殺しあい、逃げまどう戦場の難民など陰惨な場面を避けて通って不自然でないことだ。戦争の悲惨を語るに耐えられない人もいる。また事実、戦陣は戦闘という異常な出来事ばかりではない。辛酸ばかりでもない。兵士たちの心温まる日常もあったわけだし、またむなしい人間の爭闘をよそに、花はひたすらに咲き星座は輝いていて、それに目をとめた兵士もいたのである。その一面を語り伝えるのも戦争の文学だと思う。

そして私は本当の作者の心は、戦争をしてきた世代の体驗の上に立って、若い世代に「これからこうあってほしい」という願いを、物語として語り遺した作品と思う。戦中を生き、生き残った者としては、このこと以外になにをなし得るだろうか。

しかし児童のための物語である。気の毒なモミイチはどうなるのであろう。美しい自然と音楽という芸術の力で心やさしい友人らで、心の傷をいやしてほしいものである。モミイチは愛する馬とも出会わねばならない。作品は明るく美しい。生きる喜びが、希望が無限にあふれ躍動している。

二、かわいそうなモミイチ

「星の牧場」は「ウサギギクの花びらが耳のなかをくすぐる。」からはじまる。一章を六百字から九百字でまとめて、一五三章で終わる。よく練られた文章である。第一章は主人公イシザワモミイチが寝ころんでいる姿の描く。「顔をおこすと、顔のまうえにキスゲの花がゆれている。」山の牧場のお花ばたけ。底なしのあおい空に白い雲がとぶ。モミイチは顔にとまる花アブを口をとがらかして追いはらおうとしている。

〝はじめに〟で「なんかとってもハニカミヤで　ろくろくあいさつもいえない男なのです。」と紹介されたモミイチは

「モミイチの耳にはまた馬蹄の音がきこえているかも知れない。ツキスミが一頭きりで走っているか、ツキスミがおおくの馬といっしょになって走っているか、かけていく馬の蹄の音が高く低くモミイチの耳の底にきこえているかもしれない。」

というように讀者を想像の世界に誘う。（以下ルビは省略）

つづいて第2章で

「モミイチの頭がおかしくなったのは、かれが戦争からかえってからである。」

とずばりといい、「戦争にいくまでは、牧場きっての元気なわかもので、かいがいしいはたらき手であった」モミイチが、のろまな精神薄同様に扱われる人に一変してしまったことを明らかにする。

しかし「頭がおかしいといっても、ふつうのばかやきちがいとはちがっている。ふだんは、すこしもおかしいところはなくて、まったく、ふつうのひととかわりはない」のだ。ただ「記憶をうしなっていること」と「ときどき、かれの耳に馬蹄の音がきこえてくる」〝幻聴〟が起る。それは側の人には聞えないモミイチだけの現象である。

戦争で傷つき、病気にかかった。その傷の後遺症を持ちつづけている者の象徴としての主人公モミイチである。一般に心に戦争の傷痕を深く刻みつけている人もいる。戦争の影響を受けながら忘れ去っている者も多い。幸か不幸かモミイチは一方で戦争の記憶を喪失し、一方では戦争を共にした愛馬が永久に忘れられないのだ。

牧童として育ち、軍隊に召集されても、モミイチが馬のいる部隊に属したことは幸せなことであった。鍛工兵として、馬の蹄鉄をつくるかじ屋の仕事をし、ツキスミという軍馬の係りであった。インドシナ半島のメナム河のほとりで何カ月かをすごした。戦地とはいえ戦闘はなくて熱帯での楽しい生活だった。これは記憶にある。

悲劇はフィリッピンへ転進する途中に起る。マニラ湾の入口で敵の

潜水艦の雷撃を受けて乗船が沈む。モミイチは船底へとびこんでツキスミを救いだそうとした。「モミイチが死物ぐるいで、ひもをきっているのを見た兵隊が三人いる」のである。大けがをしたが救われたモミイチはマニラの陸軍病院に入院した。そのときマラリヤを併発して高熱のためうわごとをいいだした。このとき脳に異状を起したのだ。

なおって部隊を追ってスラバヤに行くが、スラバヤの陸軍病院と街の風景しか記憶にない。三年ほどの陣中生活で、インドシナのほか、アンボン島にいたといい出したぐらいでモミイチがとぎれとぎれに思い出すのは愛するツキスミと一緒にいた情景ばかり、ツキスミが戦死したかどうかもおぼつかない。

記憶喪失症は何かのショックで起る病気だ。治療はむずかしく、普通の人ととの生活はうまくいかない。

「なにをきいても、わすれてしまっていて、なにも答えられず、はずかしそうにニコニコわらっているだけ」の男になってモミイチは古巣の牧場に帰ってきた。牧場の人たちは「ばかになっていようが、ものわすれしていようが、ぶじにかえったことはめでたい」と暖く迎えた。しかしモミイチは「いろいろのことをわすれてしまっているのがはずかしいのか、あまりほかの人とは口をきかなかった。けれども、ようじをいいつかれば、ハキハキへんじをするし、ひとにはなしかけられると、なんでも答えた。ただ、じぶんからすすんでしゃべりたがらなかった。みんなと、ワァワァじょうだん話を、あまりしたがらなかった」のである。

ある日、とつぜん

「—ツキスミはどこにいますか?」

と牧場のひとにたずねた。

「—ツキスミ?」

みんながなんのことかと首をかしげていると

「—ぼくの持馬のツキスミのことですよ」

といった。

はじめ、かれがなにをいっているのか、さっぱりわからなかったが、かれが軍隊時代の持馬ツキスミのことをいっているのだと、やがてわかってきた。

「—ぼくのだいじなツキスミがいなくなった。あれほどちいさいときからかわいがっていたのに……」

といって白かばの木のみきにもたれて泣きだした。

ついで牧場のひとをおどろかせたのがモミイチの幻聴である。とつぜん

「—あっ、走っている。走っている……」

といって、たちあがったときだ。

「モミイチは顔をほころばせて、いかにもうれしくてたまらないというような顔つきをして、とおくのほうをながめていた」のである。このことは牧場の人たちに、モミイチをふびんにおもひながらも「やっぱりあいつの頭はくるっているんだ」と決定づける結果になった。

三、大砲の響にあおざめるモミイチ

南方のジャングルを思わせるシラベとモミの林にツキスミを求めて歩いていたモミイチは、大砲の音を聞いた。幻聴ではない。たちまち戦時中に引き戻された。五九章ではじめて、そして唯一カ所戦場のことが述べられる場面がある。

モミイチはメナム河のほとりか、アンボン島のひるもくらい林のなかの道をツキスミと走ったことを思い出していた。

ふいに谷の底のほうから大砲のようなとどろきがこだましてくる音をききつけた。

モミイチは、とっさにすぐそばのシラベの大木のみきにからだをかくした。胸がどきどきと音をたてて鳴りはじめた。モミイチは一枚のぼろぎれのように、木の根元へちからがぬけてすわりこんでしまった。

（谷底から大砲の音がとどろいてくる）

モミイチは、夢を見ているのではないかとおもった。そうだ、じぶんはまだ戦場にいるのだ。それだからツキスミの蹄の音もきこえるし、大砲の音もきこえてくるのだ。

じぶんが日本内地へ復員したと思ったのは、夢を見ていたのであった。まだ戦場にじぶんはいるのだ。

モミイチはそうおもうと、きゅうになみだがこみあげてきた。声をあげてなきたかった。モミイチは、ひたいに手をあててみた。またマラリヤの熱が高くなっているのかもしれない。じぶんはマラリヤの熱にうかされているのだ。まえにも、たびたびこんな経験があった。（中略）

けれども、その音の調子は、日本軍の大砲とはすこしちがうようであった。アメリカの潜水艦がアンボン島を射撃しているのかともおもったが、それにしては、音がすこししずかすぎた。

大砲の音をきいてうろたえるな、というのは、むりな話であった。けれどもモミイチは、ちょっとうろたえすぎたことに気がついた。どうかんがえても、夢を見ているとはおもえなかった。

モミイチは、耳をすましてみた。

大砲のような音はきこえていたが、砲弾がとんでいって空気をふるわすときのようなシュルシュルという音は、きこえなかった。地ひびきもしないようであった。よほどとおくでうっているのであろうか。

大砲の音のほかに、馬の蹄も、それからラッパの音もきこえるようであった。

ラッパの音は、日本軍のラッパとは音の種類がちょっとちがうようであった。（中略）

（そうだ、ちいさいときにきいた村の秋まつりのたいこににている）

しかし、大砲が秋まつりのたいことおなじだというのは、おかしかった。やっぱりじぶんは夢を見ているのであろうか。それとも、ジプシーたちが谷間の村のなかで、アメリカインディアンのような

連中と戦争をしているのであろうか。

たといジプシーの戦争であっても、もうすこしにぎやかにやかましいはずだのに、大砲の音もラッパの音も、それから馬の蹄まで、調子をそろえてたのしそうに鳴りつづけているようにきこえてくるのであった。

音の正体を見きわめなければならない。

もし、ここがアンボン島でアメリカ軍が「いたとするならば、すがたを見つけられないようににげださなければいけないし、ジプシーが戦争しているのだとすれば、これにも見つかってはならないのだ。けれどツキスミのすがただけは、たしかに見とどけなくてはならなかった。」「斥候がていさつするように五人の男や水牛小屋のあたりをながめた。」

モミイチにとって戦場は「声をあげてなきたいほど」きらいで、敵には見つからないように逃げなければならぬ場所である。斥候のように探るのは「できることならば、ツキスミをつれだしていきたい」からなのだ。

大砲の音にはうろたえる。砲弾がとんで「空気をふるわすシュルシュルという音」「地ひびき」も恐しい。ふいに大砲の音が鳴る。モミイチは「ネズミトリのバネがはねるとおなじすばやさで、地面のうえにふせっていた。」むねがドキドキする。それが楽隊であり、「軍隊の炊事場にある釜か高射砲の照空灯のような形をしている」ティンパニの音だと気付いたとき安心して「ひとりでげらげらわらいだ」すのだ。

そこで楽隊をやっていたジプシーたちに、インドシナ半島で同じ中隊だった戦友の面影を見る。波田准尉、宮野曹長、萩軍曹…、なつかしくて鈴をふりながら、かけつける。ラッパ手が〝カッカ（閣下）ラッパ〟で迎えてくれる。ここまでモミイチは戦場にいる気持だったのだ。お、戦友……同じ部隊の戦友と思ったのは勘ちがいで、それは「大しっぱい」だったで、モミイチは現実にもどる。それまで、恐怖の戦場で愛馬を見つけ、救い出さねばならないと緊張しつづけのだ。臆病で気の弱い兵隊だったモミイチはツキスミを案じつづけた。戦場ではなかったという安心が、げらげらと笑いを爆発させるのであり、出会ったのが友軍であるから、躍りあがってかけつけるのだ。やさしい弱い兵隊が強い働きをする時は、与えられた命令ばかりではない。愛馬や戦友、祖國、いつも愛や誠実さが流れているものだ。

モミイチのやさしい心は物語の随所にみられる。顔にすり寄ってくるリスを驚かすまいと、くすぐったさをしんぼうする（一四八頁）のはもとより、シャクナゲの花びらに触れていためてはならないとか、カーペットのように咲くマツムシ草を踏むにも気を使う（三九頁）ような男だ。軍楽隊の演奏もいさましくて、こころがおどったが、オーケストラの方に牧場に寝ころんでそよ風にふかれるような快さを感じる男なのだ。

木の実細工屋のトロンボーンの作るロザリオを見ては「ひとつジュズがほしくなった。輸送船といっしょに海の底にしずんだ、戦友や軍

馬のために、ジュズをつくっていのってやりたい」とこまやかな思いやりをする。

白い雲を見ても泉で顔を洗うとき、また朝明けのとき、星の輝く空にも、ともに戦場にいて心を通わせあったツキスミが現われる。馬といっしょだったのは戦争中のことであるが、それは平和で美しくやさしい情景ばかりであり、それゆえ愛馬が海に沈んだのは、いたましいことであった。

モミイチのあわれさは戦場でのほかのことは忘れてしまっているのに、愛するツキスミにまつわることは忘れられないことだ。そして不幸なことに、頭が確かだといわれる周囲の常識人のほとんどが体験した戦争中の気持を忘れさっていることである。「自分のいうことは信用されていない」と知って、もう誰とも話さなくなり、「じぶんの頭がどうかしている」と自分でも思いこんだことだ。好んで孤独を求めるわけでもないのにその位置に置かれてしまう。寂しさも解ってほしいし、話もしたい。だが頭の弱い、かわいそうな者と哀れまれる立場になってしまうと、除外された者でしかない。ジプシー仲間は違っていた。この人たちといると眞に幸福で心の安らぐ生活があるように思う。だが現実にそのような暮しがあるのだろうか。秋たけなわの高原に尋ねていって再び幸福に出会うことのなかったモミイチは、さきの現実はまた夢だったのだろうかと思いまどうのである。

四、羨しいジプシーの生活

山に入って知りあったジプシーの前では、モミイチは平気で話すことができた。その人たちの話の内容もそのまゝ信じた。また「モミイチも立ちあがって、手をさしだして握手」（一三五頁）するほど、初対面から打ちとけることができた。モミイチは誘われるまゝに、それぞれの住いにすんなり入っていって生活をともにする。

「わざといなかことばを使っているよう」（九二頁）な対話はみんなが飾り気がなく卒直で、気がねがないからであり、またユーモアある話しぶりを楽しむ人たちである。また「おれはまえから、戦争にいっているあいだから、これ（ハチカイ）がやりたかったんだ。……これだけミツバチがいて、なにがさびしいことがあるものか。それにクラリネットだってあるわな」とも話すような人柄なのだ。

英二はジプシーという自分の創造した新しい人種を「うつくしい山のなかの花と森と谷川と雲と昆虫と霧と小鳥と、朝やけや夕やけや、夜のたき火や歌や音楽やハチミツやノブドウやキノコやトチノミダンゴのすきな人種――自由きままにくらしている。山のなかを愛してさまよいながらくらすひとのこと」（四四頁）と定義している。

「おれたちはふうらいぼうだからな。花から花へミツバチといっしょに花の旅をしているからな」（五五頁）「人間がたのしくくらすのが目的だから、あくせくはたらきすぎてくるしみがふえるようなことを、こころの底からけいべつしていた」（一三五頁）という人もいる。ダケカンバの木の枝に眠り、小鳥のためにジャムを製り、小鳥用の食器を造るやさしさをもった人たち。太陽の昇る前の朝四時に起きて、

ホトトギス、ブッポウソウ、ウグイス、ツグミ、オナガ、アカハラ、ホシガラス、アマツバメ、ウソ、ビンズイ、ミソサザイ……、小鳥のコーラスを聞く人もいる。そしてみんなが音楽を愛して、それぞれ異る楽器を分担している。

モミイチが初めて聞く音楽、トランペットは「たましいがフワーッとぬけだしていくようだし」、「足のさきからメマイをしたような」うっとりした気持にさせる。クラリネットの調べはやわらかみのあるゆるやかな音で「はじめちょっと耳がくすぐったかったが、くすぐったいのもすぐとれて、汗をかいてねばねばしていたからだが、きゅうにサラッとかわいてきたようであった。（ミツバチは）クラリネットからながれていく音楽にのって、フワーッとながれていった。クラリネットのラッパのなかからふきだされたようなかっこうであった」（三二頁）のである。モミイチが「音楽ってばかにいいもんだ」と思い（四五頁）、「食事のあとでは音楽がききたくなるものだなと思った」のも当然のことである。

ジプシーは「一日のうちの半分、あるいは一年のあいだの半分だけはたらけば、けっこう楽にくらせるものとかんがえていた」（一三五頁）が、決して不眞面目なのでない。大ぼらも吹くけど、音楽の練習になると別人になったように嚴粛に統制のとれた動きをする。モミイチも研究して美しい音色の鈴を作って仲間に入り、オーケストラにも加われる。「まねをしたくなってきた。牧場にいやなことはすこしもないのだが、もっとのんきそうに」（五五頁）モミイチが思うのは当然のことである。

そのような自由人で気ままな生活はモミイチのように常人と変った人間だけに開かれた門ではないだろう。また社会に背を向けたと速断されやすいジプシーだけの特許ではあるまい。万人が心の底にもっている願いであり、そして作者は実行ができると思わせるように描いている。こういう条件が數々そろいすぎるとユートピアの夢物語のように思われてしまいがちだが、ここで英二の描く理想的生活の具体例を引き出してみよう。

大体フルートのテントというのはダケカンバの樹上にあって、鳥の巣のようなカゴだ。眠ろうとするとリスが降りてきて甘える。朝起きて顔を洗おうとしてもオケもヒシャクも洗面器もない。モミイチはフルートがどうするのかと見ていると、顔を泉の水につけたままで、ボコボコと水をふいた。ぬれた顔をふくかわりに、コケモモにすりつけるのである。「それでおわりであった。」（一五六頁）

まったく〝野蛮〟で、やんちゃな子供っぽい情景、冒險と創造を好む年代の児童にはたまらない魅力であろう。

クラリネットのテントはヨットの帆を二枚あわせたようなグリーンの円スイ形、ホルン家はルリ色のつやつやかがやくかわら屋根、トチの大木の下にある、テラスのある水車小屋、花畑や白カバ林の中に建っているのは正しく明るい絵である。その中を赤い花もようのシャツや、スンバワ織のようなガウンを着たり、カーキ色のショートパンツ大男がパイプをくわえていたり、トルコ帽の男が楽器を持って歩いて

ているなどすべて南國風な衣装だし、これまたおもちゃ箱から出てきたかと疑わしくなるだろう。

モミイチがニジイロのミネラルをごちそうになって「アメリカ製のぶどう酒け？」と驚くところがある。（九八頁）ミネラルは泉の水で「ガッパコ、ガッパコとふきだしている」と聞いて「みんな泉の色はちがってるのけ、おったまげるべや」とジプシーと同じ言葉使いになって驚く。みんなはふきだしたが、あわてて、ムラサキは野ブドウの汁、ダイダイはカリン汁、赤はチェリーの汁をまぜているのだべと、色と風味を説明してやるのである。

フルートの作るジャムは高原の花や木の実とハチミツを使ったもので味もいろいろ「都会のデパートでは、めったに見られないようなめずらしい」ものばかり、ホルンの家の朝食のあと、さとうはいれずにグウズベリーのジャムをなめながら紅茶を飲むしきたりだ。クルミの砂糖だきジャムやアンズのあまだきをつめたトチの実餅やカニやカタツムリやクルミバターをはさんだ野趣あるピッツアも高原のものだ。

クラリネットの献立は

鹿のほし肉のくし焼

キャベツやレタスに山ウド、キスゲの花のドレッシング、レモンの汁かけ

クルトンとパセリの粉のスープ

パン、バター、チーズ、ジャム、マーマレード付き

紅茶

モミイチはサイゴンのフランス料理にもまけないごちそうと感じるのであった。

ジプシーたちの食住生活はいかにも自然とともにあるシンプルで、また十分に文化的といえよう。

五、行き届いた教育的配慮

「星の牧場」は大へん教育的な童話である。いわゆる單に〝面白くてためになる〟ではなくて〝面白くて常識を破る面白さ〟なのだ。子供の求知心や冒険心をそそる魔力をもっている。そのうえ空想を生活の実際に生かし実行できる現実の裏付けをもっている。子供が興味を持ち、それを追及し試みることができる。その点、教育的配慮の豊かな児童讀物であり、子供に生活改革をそそのかす思想書の一面をもっている。

もちろん自然の美しさをうたい、音楽の楽しさをわからせるといった効用はいまさら説くまでもない。よく練られた詩のような豊かな雅やかな文体もだ。いわんや作者が、あとがきで次のようにいう内容のことは論ずるまでもあるまい。

読者の皆さんも、それぞれ、ふるさとの山々か、遠足にいって遠くの山々を眺められた時に、モミイチの牧場や、この物語で友だちになっていただいたジプシーたちのことを想像してくださることだろうと思っています。

作中の、コメツブシロハナという植物は、みなさんの学校の植物図鑑にはのっていないはずです。ぼくが勝手につくりだした植物です。ゴメンください。けれども、そのほかはホンモノです。日本の高山植物は、心ない登山者によって、しだいにへっていきます。悲しいことです。ぼくは物語のなかで、見わたすかぎりのお花畑を咲かせてみました。ほんとうの高山植物も、もっともっと咲きひろがってほしいものです。

高山植物だけではありません。小鳥も中鳥も大鳥も、シジミ蝶もキベリタテハもアゲハ蝶も、いっぱいいっぱいふえてほしいものであります。

竹の楽器アンコロンの演奏を、ぼくはジャワ島ブゲンディの湖のほとりでききました。たえなるしらべを、水面に咲いていたやさしい水草の花とともにいつまでも忘れることはできません。アンコロンのスケッチを一枚いれておきましたが、いろいろの種類があります。みなさんも工夫をして作って鳴らしてみてください。日本は竹の国ですから、きっとよいものができるだろうと思います。

自然環境の保護や音楽に寄せる愛情はこれでわかるというものだ。試みに作中に出てくる動植物の名を數えてみると次のように多數である。

○灌木も含む樹木　26　南方の樹木　5

ほかに竹、コメッブシロハナ、イバラ、

○草花　日本産　27　南方はサンバギータ

○小鳥　23　ほかにオウム、インコ、白鳥

○小獣　13　ほかに馬のほか水牛

○昆虫　13

ピッツパイにして食べたカニ、カタツムリはどう分類したらいいのか、またグウズベリ、レモンも除いた。サルノコシカケも一カ所出ているが、広辞苑にはサルノコシカケ科に属する木質のキノコとある。この數多くの木や花や小鳥らが集まる夏から秋にかけての高原はいかに豊かなものかを想像させてくれる。そしてその装いの急変ぶりは、幻想的なこの物語の舞台にふさわしいものである。

また冒険、探険をすすめると私がいうのは山歩きや野営の魅力を感じさせる点で、そこに咲く花を見ることも、野性的に大地に転って自然と一体になる楽しみの強調にある。現代は山小屋風な小屋でもキャンプ用テントだって手に入れる気になれば容易に手に入る当節である。英二は少年のころ〝自然に帰れ〟に賛成する父とともに阪神仁川の松林の中の小屋で夏休みを過した思い出もあり、フイリッピンのダバオでそれによく似た小屋を見て懐しんだ記憶もある。(注3)〝シンプル・ライフ〟への憧れは父ゆずりなのであろう。落葉をたいて紅茶をわかしたり、パンを焼いたりした。紅茶はいつも松葉のこげた匂いがするし、パンにも松葉の匂いが薫じこまれていたと回想するとともに、一人寝の父の淋しかった模様や母が悲鳴をあげる現実をも書きとめている。

この物語が書かれた昭和三十七年は、日本が高度成長へ歩み出したころである。人口の都市集中も始まっていて、この年二月には東京都

では人口一千万人を越え、テレビの契約台数も一千万を突破している。秋には新幹線が試運転で時速二〇〇キロを出し日本鉄道のスピードの新記録を出している。

それから十余年児童と自然との接触は薄れるばかりだし、日常口にする食品もインスタントや加工品がふえるばかりだ。輸入清涼飲料は飲まれるが、水をうまいと思う感覚は子供から消えてしまっている。ジプシーらの食卓の自然食に食欲をそそられる子がいくたりいるだろうか。ミネラル水に果汁を落すだけの工夫で七色のニジのような飲みものになる。与えらたもので満足する惰性的な受身の生活を改めて、ちょっとした創意で生活を豊かにする、創造的生活のすすめとみてよい。砂糖を使わずにジャムで紅茶を飲む、そうした実例を作者は神戸に住む白系ロシア人から学びとっている。(注4) ニジのミネラルの発想はインドネシアの飲みものから。

そして何にもまして多く学び参考にしたのは信州の自然と、そこに住む人たちの生活である。英二は二十一才のころ栃木県の日光で古河電氣精銅所の少年団を指導したことがある。軍隊に入営する前年のことで「美しい自然の中で子供たちと遊んで暮した」(注5)が、復員後はもっぱら信州であった。この物語のあとがきでつぎのように述べている。

ぼくは毎年に夏なりますと、絵の道具をかついで、信濃の高原や牧場をさまよい歩きます。美しい山の穂を眺めたり、花野にねころんで雲を眺めたりしているうちに、いつのまにかぼくの心のなかにジプシーたちがすみつくようになってしまっていました。

そして信州御代田の井幹屋の生活は「愛のくさり」の中の「庭の千草」にしのばれる。南方で知りあった佐藤春夫の疎開先を訪ねて、知った宿で、「三人の子どもを持つ父親になってから、おばあさんの味を知らされるような幸せに恵まれた」となつかしさと感謝をこめた随想である。野ブドウの液をすすめ、栗ひろいに誘うのも、虹マスの養殖場へ案内するのもこのおばあさんである。毎朝、花をかえ、塩ユデのトウモロコシをおやつに持ってきては町の情報を話す、小鳥や花のことを教えてくれるのも宿の老夫婦である。自然にとけこんだこの里の人々の生き方をここで教わった。

信州での毎年の夏休みの生活がなかったら「星の牧場」は誕生しなかったであろう。大阪という大都会育ちの英二に、幻想としか受けとれないような、大自然の美しさを信州で教えれた。モミイチの幻想として、讀みすごしがちだが、私は書かれた自然の変化の不思議さを、そのまゝ信用している。英二がこの信州で目にしたものであるのを疑わない。

それを根拠づけるのは英二の眞摯な性格と適格な表現、情熱をこめた書き方をあげたい。これがまた、この物語りを貫く教育的ということになろうかと思う。

七九章からジプシーのにぎやかな自慢話が大ほらの話にエスカレートする。

「トランペットと競争してソプラノを出そうとしたコマドリが、ノドをいためてハチミツを吸いにゆく」「カモシカの群にファゴットを

吹く、二拍子のリズムを急に三拍子に変えるとでんぐりがえってしまった」「チューバで野鴨をじゅずつなぎにして捕えた」「ホルンで白鳥の卵をあたためてかえしたら、ヒナは上下に輪を描いてとぶ」……疑っては悪いような気持になっているモミイチに気付くと、ジプシーはちゃんと訂正して、ほんとうのこと教える。そのくだりは一一一章でこんなぐあいだ。

「きのうきいた話、それ、白鳥がホルンのラッパのなかでヒナをかえしたって、あれはどこなんだい？」

モミイチがたずねると、ホルンはニヤニヤしながら

「あれはずーっとむこうの、みずうみのほとりさ」

モミイチは、ホルンがニヤニヤしているので、やっぱりあやしいとおもった。

「あの話は、うそかい？」

「あれはだな、まるっきり、うそってことはないし、まるっきりほんとうってことはない」

ホルンは、わらっていた。

フルートが、

「モミイチ、あの話を、ほんとうにしていたのかい？」

「なんだかおかしい気もしていたが……」

「ファゴッドやチューバがすました顔をして、あんな大ぼらを話すもんだから、おれもいっちょかついでやろうとおもっただけだよ。しかし、白鳥がいっぱいとんできて、そしてなついて、平気でホルンのラッパの口にまではいったりするのは、ほんとのことだ」

このように訂正すべきは訂正する物語の内容へのゆきとどいた配慮これを教育性豊かといわずして、なんといったらよいだろう。

しかし、英二が信州を発見し、夏を信州で送る生活の朝晩に、青春の十年を戦争に過した苦い反省の思いが浮ぶことがなかったろうか。戦争へ盛りあがる時代の中で生長し、英二は疑わず軍旅に従い、陸軍大尉にまでなる。敗戦は思わざることであったろう。戦いに敗れマラリヤに蝕ばまれて故國に帰ってきた戦士の心に去来ししたものがあったはずである。美しい自然、大地の恵みに生きる人々、英二の心は安らいだ。島國の偏狭なそしてせっかちな生きざまをした悔しさも湧いたことと思われる。

自分にとって青春のすべてだった中國から太平洋への戦争は何だったか。唯一の収獲はアジアの各地を歩き、自分の眼で、足で外部の世界を知ったことではないか。それは民族にとても、數百万の大和民族が、それは兵士としてではあるが、大陸を南海を踏みしめた共通のものであり、この体験こそが貴重だと私は思う。中でも英二は南國の美しい自然、その中に調和し、心豊かにやさしく、そしてひたすらに生きる人たちを知ったことを幸としたに違いない。そうした体験を次代に伝える義務がある。敗残に心を痛める戦中派にとっては次代を恃み期待するより外の方法はないのだから。空は澄みわたり、花の色は冴えかえる信州の高原で、英二はマラリヤの再発の身を養いながら、そのような方向での再起を考えたのではなかろうか。

六、青春のすべてを戦陣に

庄野英二について見落すことができないのは、その家庭、わけても英二を強引に農学校へ進学させた理想家肌の教師だった父の影響と戦争体験、それも南方インドネシアでの生活と連合軍の捕虜収容所での体験である。

英二は大正四年（一九一五）十一月二十日山口縣萩市で生まれた。父貞一は萩中学の英語教師であったが、自由主義的な私学大阪帝塚山学院の初代院長に迎えられる。六人兄弟の次男で六才下の弟に芥川賞受賞の作家潤三がいる。父は初代大阪府教育委員も勤めた活動家、子供たちへは筆まめに手紙を書いたという。母春慧は武家ふうのきびしい気風、両親とも口や態度には出さないがしんからの子供思いだった。

幼稚園、小学とも帝塚山学院を終えた昭和三年（一九二八）父の強力なる主張により大阪府立農学校に入学する。自筆の年譜に依れば「農家でもないのに、なぜ農學校を選ぶかということで、受験前父母の論争は激烈であった。その頃、父は武者小路実篤の「新しい村」やブラジル移住について深い関心を持っていたとある。

しかし大都市大阪に住む一家では現実ばなれした理想主義的でありすぎたようだ。少年英二は父の熱意に負けたかたちで進学したが、次第に文学へ目を開いてゆく。昭和八年、関西学院文学部哲学科に入学する。できれば将来、児童文学の創作をしたいと半ば決心していた。(注6) 西宮市上ケ原のキャンバスそのものが童話的で心を浮きたたせた。ともあれ農学校の五年間は道草をくったようでありながら、都会育ちの英二に強く影響しているだろうと思われる。作品に數多く描かれる花や小鳥への暖かい目は、愛情あふれる恵まれた家庭環境によって開かれたのであろうが、農学校の体験も磨きをかけたとはいえるだろう。

四人の男兄弟は健康に育って、軍籍に身を置く。終戦のとき長兄は砲兵将校で清水の海岸警備に、上の弟（潤三）は学徒出陣の海軍士官、下の弟（至）は國土防衛の陸軍航空兵だった。(注7) 昭和十二年（一九三七）七月に蘆溝橋で日中両軍が衝突して日中戦争が始まり、八月には上海に戦火は広がった。十四年九月に欧州で第二次世界大戦、十六年十二月には米英に宣戦布告と日本が國運と堵し、かつ泥沼に陥ってゆく時代であった。軍國一色の塗りつぶされ、誰も逃れられる運命にはなかった。

英二が現役兵として大阪の歩兵連隊に入営するのが、十二年の一月であった。幹部候補生となり、北満からはじまって各地を転々、臨時召集が續いてマレイ半島で敗戦を知る。復員できたのが昭和二十一年（一九四六）六月、三十一才になっていた。青春の十年近い歳月は軍務に明け暮れた。

英二がいかに誠実で模範的な陸軍将校であったかは、小説「花更紗」に精しい。命令があれば、何処へでも行く、死地にとびこむ覚悟は常にあった。「次期作戦に備えて体力を蓄積し、精神の健康を保持すべく努力することに留意していた」彼は、倦怠と無為の時間をも〝旅人〟のような解放された氣楽さで過すことができた。ジャワの平和や豊か

さや風物をひとときのこととして楽しんだ。またこの地で武田麟太郎や佐藤春夫と出会えたことは、なによりの幸せであった。特に春夫の詩人らしいインドネシアの自然と文化の特色の指摘は、英二を刺激し新しく眼を開かせた。

「学窓を出て最も哀歓多かる時期を、私は同時代のほとんどの人々と同じように戦場と兵営ですごしました。この本には、何らかに戦争に関係あるものだけをえらんでみました。今この本を編むにあたり謹しんで戦没された方々に対し静かに鎮魂の祈りを献げたいと思います。」

「ロッテルダムの灯」の初版のあとがきで英二は、こう語る。この言葉は重い。「やはり残しておくべき」体験と思ったのである。その思いは児童文学への道を選んでいた英二には、児童へも語り伝えたいものとして、高まってゆく。ともあれ、英二の戦争体験を、自身で書いたものから辿ってみょう。

昭和十二年　一九三七年　二十二才

一月十日、現役兵として大阪歩兵第三十七連隊（後に中部第二十三部隊）に入営、新兵当時の思い出は「当時の伍長勤務上等兵が出現しようものなら、私はとっさに一一〇番へダイヤルを廻して我身の保護を求めるかも分らない」「鳩」「六方焼」

四月北満へ、松花江に沿う鶴立崗に駐屯

六月幹部候補生教育のため三江省ホリカンで集合教育を受ける。ゲリラ出現の非常呼集に小きざみにふるへ、母の面影が浮ぶ。また初めて弾丸の音に聞くとまたふるえだした。「母のこと」

八月父が面会に訪れる（同）

昭和十三年　一九三八年　二十三才

一月、幹候生の教育で豊橋の教導学校へ入校のため内地帰還、佳木斯—牡丹江—釜山経由、関釜連絡船は金剛丸。六月まで高師ケ浜、天狗原で毎日毎晩演習。「椿」「カーネーション」

昭和十四年　一九三九年　二十四才

四月、少尉任官、新設部隊の小隊長として華中へ、大阪櫻島港を英蘭丸で出帆、翌日櫻満開の関門海峡を通過、揚子江を遡って漢口に上陸、大別山系の山中で守備につく。隊に美校出身の補充兵田中角治郎がいた。「美校出の兵隊」「母のこと」

九月、武昌の警備担当。「ある船の一生」

十二月、蔣介石軍の冬季攻勢さかん、南昌で兵団長の警衛隊長、宿舎隣りの教会のクリスマス・キャロルを耳にする。「クリスマス・キャロル」

昭和十五年　一九四〇年　二十五才

江西の戦場で敵陣と八〇〇㍍距てた地下壕で対峙をつづける。「菜の花」

四月、南昌錦江付近の戦闘に戦死した中隊長代理として参加、十五日錦江河畔の高地を攻撃、午後突撃中、右前膊骨折貫通銃創並に右肘関節盲管銃創兼左膝関節の跳弾破片創を負う。出血多量のため一時は気を失う。一昼夜がかりで南昌野戦病院へ。担架、トラック、貨車で南京陸軍病院へ後送、六月病院船で広島へ。父も母も見舞いにかけつけ

つける。「母のこと」「トンビ」
入院中油絵のけいこを始める。「年譜」

昭和十六年　一九四一年　二十六才
十七年にかけて、神戸に住む白系ロシア人セルバコフさんの家庭へロシア語の勉強に通う。「木苺」
戰傷の右腕関節部に機能障害が残りマッサージを必要とする。

昭和十七年　一九四二年　二十七才
陸軍中尉で内地補充隊に勤務。
七月、南方各地にジュネーブ条約に基く正式俘虜収容所が設置され、ジャワ俘虜収容所チラチャップキャンプ勤務に発令、中旬E少佐と赴任、宇品から船で半月がかりでマニラへ、一週間ほどマニラホテルに滞在、陸軍機でダバオへ。海軍機に便乗待ちのため、ダバオの日本人旅館〃ときわ〃で一カ月をぼんやり過す。八月末バタビアに着いた日、武田麟太郎と会い、藤沢桓夫の著書など見せる。
九月現地に着任、二カ月書類やカード作成に追われる。「絵具の空」ほか

昭和十八年　一九四三年　二十八才
二月、チラチャップキャンプ閉鎖、バタビアの本部勤務となり十一日引揚げ、俘虜の一部は泰緬鉄道の建設に向う。以後毎晩のように武田麟太郎と行動を共にする。
九月、陸軍大尉、この間スマトラ縦断鉄道建設の責任者と予定され現地視察、濠北離島に飛行場建設に赴任の計画もあったが途中で計画消滅
十月、五百名の白人捕虜を輸送指揮官として日本へ輸送、東京へ出張。十一月三日、福岡飛行場発でジャワへ帰還、七日武田麟太郎訪問、武田は翌日急に飛行機の便あり帰還の途につく。いれ違いに武田の名刺をもって佐藤春夫が来島。軍報道班員としてであり、当時朝日新聞に「じゃかるたをとめ」を連載中であった。年譜に「一カ月程の間、軍務の余暇に観光案内役を勤めた。戰爭中とは云いながらジャカルタでは文学の勉強をしていたようなものであった」とある。
「ダンクウェル」「サンパギータ」「我が家のコッテイジ」「花更紗」「武田麟太郎」

昭和十九年　一九四四年　二十九才
四月、航空部隊におり、部隊長のお供で前線基地視察、メナドからホーランジアへ、米軍上陸中の無電にヌンホール島に着陸、一泊、島のおうむを画材に百号の「ヌンホール島の朝」を五九年に描く。第四日目アンボン島に一泊、メナドへ帰る。「おうむ」「アレン中佐のサイン」
私はジャワから南方軍總司令部の転進とともにシンガポールへ、それからフイリッピンのマニラへ赴任し、それからスマトラへ派遣された。スマトラにいる間にマニラに初空襲があり、私のいた司令部はサイゴンへ転進してしまった。「ツバメ」

昭和二十年　一九四五年　三十才
三、四月、サイゴンに駐留（三月十一日仏印でフランス軍を攻撃）日

本人会で中西利雄の「水絵の描き方」を借り、その翌日空襲を受ける。

「借りた本」

四月二十九日、独立混成旅団はマレー方面防衛のためサイゴンを出航、メコン川を遡江、プノンペンから鉄道でマレーへ、行程二カ月、七月初めになって任地に到着、穴堀り作業を始める。

八月十五日はタイピンの東方で、マレー縦貫鉄道のタイピンとクァラカルサンの中間にある駅に近い峠のゴム林の中であった。「ライスカレーの思い出」

十一月、淡路島ほどの面積の無人島レンバン島に日本人七万人ほどが収容され、開拓生活を送る。「借りた本」「はり絵」「弁当」「つぼかずら」

昭和二十一年五月、米軍リバティ船で帰國、六月名古屋港に復員。

「長い航海」

昭和二十二年三月、突然逮捕される。刑事二人に付添われ大阪から巣鴨拘置所へ。俘虜に関する戦犯容疑のためか。「雀」

足跡は全アジアに及んでいる。激しく戦ったのは中支においてだけである。負傷後の勤務は戦闘部隊ではない。軍隊の組織にいても人間関係で患わしい面もなく、捕虜との間の関係も円満に運び得たことは、温厚篤実な人柄によるのだろうが、幸運でもあった。

戦争とのかかわりあいに於て、戦闘場面がないのは当然のことであって、題材を南方にとる限り、戦うべき敵と顔を合せたことは一度もない。それどころか土地の人々が戦いとかかわりなく平和に暮らす姿をつぶさに見ている。ユートピア、アンボン島が〝夢の島〟としてでなく現実にあったのである。英二に戦争や憲兵とか日本の軍隊について批判がないわけではない。しかしそれは敗戦になって以後の反省から生まれたものだと思われる。

敗戦が動かぬものとみられるときのマニラの總軍司令部がいたずらに煩雑な事務をふやし判コ貰いに忙しい様子を伝えても片隅の記事だし、[注8] また特攻に散華した若者をいたむにも「こちようらん」に托してさりげない。[注9]

また「星の牧場」では例えば

オーボエがいそいでものをいおうとしてどもるところは、兵長の江藤にまったくよくにていたが、江藤兵長にまるでにていないところもあった。それは、かれのつぎのような話のなかみである。

「――おれが、そもそもジプシーになったのも、人間のさびしさをまぎらそうとするためであった。ひととはなれて山のなかをさまよっていることは、そりゃさびしいさ。しかし、人間てものは、人間と人間といっしょにくらしていてもさびしいもんだから、しょうがねえなあ。はやくあきらめてしまって、雲や小鳥や星たちとなかよしになっているほうが、いくらかましかもしれねえ。おれがオーボエなんてけいこしはじめたのも、いや、おれだけじゃねえ。ジプシーたちがみんなそろって笛をふいたりラッパをふいたりするのは、みんなちからいっぱいためいきをついているみたいなものだ――」

（一六七頁）

と、「兵長にまるで似ていない」というような表現で訴える。これは私の思いすごしだろうか、当時の陸軍下士官の粗野な点の指摘とみるのは、この兵長は大声で叫び、せかせか命令していたのだろう。そして人間のあわれを解する情緒に少し欠けていたのだろう。職業軍人や憲兵の非人間的な言動を、厳密に、かつ冷静に伝えるのは記録性にすぐれた後の「アレン中佐のサイン」になってである。いわば美しい幻想に包まれた「星の広場」は全体が太平洋戦争突入、破滅とゆとりなく歩んできた日本全体に対する批判といってよいのではなかろうか。

付記　〝アレン中佐〟との出会い

英二は續いて昭和四十七年（一九七二）十二月「アレン中佐のサイン」を岩波少年少女の本の一冊として書く。「第二次世界大戦下のジャワ、日本軍の俘虜収容所長とアレン中佐以下の連合軍俘虜たちの、極限状態で生まれた心のふれあいを描く」と書店が要約している。巻末に東インド諸島とセレベスのポニイ湾の地図を添えた、小学六年、中学以上の児童を対象にしたものだ。

「小説であって事実の記録ではありません。しかし、これもまた第二次大戦中に、実際にあった事をもととして作品に仕上げてあることを書きそえておきたい」

「メエルモウチョという架空の地名以外は……何れも地図に存在しています。……呼稱の変わっているものもありますが、当時の日本軍人が、呼稱していたとおりに記載しています」

「私がなぜ、このような作品を書かねばならなかったかということは、改めてしるすには及ばないことと思います。」

英二が「あとがき」で讀者の児童に訴える言葉である。

ジャワからアンボン、マカッサルと俘虜を連れて航海した椎崎大尉が実在した人物か、あるいは似た性格の指揮官がいたか、チラチャップ俘虜収容所の庄野大尉とあまりにも似通っている。キャンプのことは、「まるっきり作者の空想だけで作りだしたものではありません。当時これに似たキャンプが、ジャワに実在していたことも事実です」と、英二がいたチラチャップのことを匂わしている。チラチャップが、どんなにか楽しいキャンプであったことは「ロッテルダムの灯」などで、再三、英二が描いたことだ。また昭和十九年、基地視察の途一泊したアンボンのサンゴ礁をくだいて造られた飛行場が、連合軍俘虜が造ったと聞いた作者は、その俘虜たちと管理者に胸を痛め、同情したに違いがない。また英二はジャワから東京へ、潜水艦と飛行機の攻撃におびえながら俘虜を輸送したことがあり、庄野の体験を重ねて出来た物語だろう。

前四分の一はチラチャップの俘虜生活が描かれ、そのうち健康な一二〇〇名が選ばれてアンボンに飛行場を作る作業隊となる。十日の航海を経て到着した収容所バトドア高地は人間の住める場所ではなかった。飲料水すらないはげ山であった。そのうえ冷酷な少佐が上司であり、戦闘第一の方針をとっていた。椎崎らは冷やかに見すえられ、現

地自活をいいわたされた。作者は「職業軍人によく見られる、威張り屋」と表現している。マラリヤや赤痢の流行に大きな犠牲をはらって飛行場を完成する。

アレン中佐というのは「悲惨な狀態の中にあっても、イギリス將校の誇りと、その軍人らしい態度はくずさなかった。主張すべきことは堂々と主張したが、命ぜられたことがらは確実に履行した」「口にこそ出さなかったが、連合軍の戰勝をかたく信じていたようであった。そして勝利の日までは、俘虜として、イギリス將校として、恥ずかしくない態度を立派にとろうとしていることが、日本軍幹部の誰にもありあり察しられるのであった」ような人物である。

ジャワへ帰れるようになっても、マカッサル、ケンダリー、ラハ島と俘虜は転々とさせられる。作業や遭難の苦難に勝者も敗者の俘虜も力をあわせて立ちむかった。そのうち八月十七日になって、ラハ海軍警備隊長がオートバイで椎崎に面会を求めて「戰爭が中止になった。敗戰にあらず、勝ち戰にあらず、協定により停戰」という要領を得ない連絡であった。急ぎ俘虜を輸送するよう命ぜられて四隻のプラオで出発するうち、敗戰ということが次第にはっきりしてくる。いままでの立場が逆になったのだ。しかし共に苦労しあって生じた理解と友情は國境を越え、勝、敗者を越えていた。お互に口數の少い航海をまつとうする。その間、椎崎は「自分にも罪がある。いや自分には罪がない、自分は軍事裁判で死刑になるのだ、いや死刑になるようなことはない」と自問自答しつづけていた。

もう会うことはあるまいと思える別れの時がやってきた。アレン中佐は椎崎の握手を求めて、椎崎の武士道の精神をたたえて、自らも騎士道によって今日までやってきたことを誇った。そして椎崎の手帳に、感謝をこめた証明書にサインをした。

この物語には、簡單にだが、要領よく太平洋戰爭の全貌も紹介している。そして前線にあった將兵が敗北を知ってゆく狀況と心理を時間を追って伝えている。この部隊が俘虜とともにあっただけに、勝敗にゆらいだ心理は複雜であった。その間、非常な困難な狀況であったこと、そのような悪条件のもとで、下級將校が人道的に終始することがどんなにかむずかしいことだったかよく解る。事実椎崎のような立場にあった人たちは戰罪犯罪人に指名され、多くの人が俘虜虐待の罪名で処刑されたのである。言葉の通じぬための誤解や心が通じあわなかったばかりに些細なことが原因になったこともあるが、食糧や資材の不足なのに遮二無二に無理を通そうとした作戰の誤りであった。椎崎だってアンボンの不毛の地で多數の俘虜を死なせたのであるから、その点を衝かれると弁解できないはずであった。英國やオランダの捕虜たちも偉い。苦難に黙々耐えるし、節度も誇りを失わぬ人たちである。さらに誠実であり、いっしょうけんめいの努力することは、何処の國の人の心にも解りあえるということを教えている。

さらにいえば、これら捕虜との出会いは、日本人だけしか知らなかった英二に、外への眼を開かせ、人生観に大きな影響を与えた。英二は日本が講和条約で國際社会に復帰するのを待っていたように、昭和二

十七年（一九五二）年七月、西ヨーロッパへ旅立つ。中近東、インドにまで足を伸して十一月に帰國する。この旅の収穫が、昭和四十年（一九六五）の「雲の中のにじ」。日独仏三人の青年がシリア砂漠をジープで横断、自然の猛威にさらされる物語、中にビルマ戦線のことが回想として記述されるが、ＮＨＫ児童文学奨励賞を受賞した。

英二は「アレン中佐のサイン」は花々しい英雄でなくて、一般の軍医や下士官、兵を描き、それぞれの職分に盡力する姿を伝えている。材は英蘭の俘虜とともに過す特異なものであるが、どの戦線の兵士も同じような辛酸をなめたに違いない。戦争の見逃されやすい一面を、眞相に近く伝えたものとして特異な作品といえよう。当時、召集されてお國のために闘った兵士たちは、この本の讀者の祖父に当るような年齢になっている。負け戦になったばかりに、また飢えや病気と苦労が多かったばかりに、語り伝えることに意気あがらぬ戦争体験である。それに現地自活の中國などの戦線は掠奪であり、侵略であって恥しいことが多く起った。どう考えても戦争の讃歌にはならぬ話である。國運をかけた大きな戦というものが、どんな猛烈なエネルギーを持ち、軍人を職業とするのではない庶民までをいやおうなく巻き込み犠牲を強うるものかの思いは深い。しかし、それが昭和の歴史であり、十五年の長きにわたる歩みである。空白にしてはならない事実である。英二は児童に伝えるために戦中を生きたものの義務としてその一端の仕事をなしたといえよう。

注

(1) わだ・としお　「庄野英二論」　45・1・1　図書新聞
〝コドモ〟について筆者は「作者の外なる、また内なるコドモと解していただいていいのだが、私としては、一つの作品が必ず持たねばならぬ、新しい発見、提示としての児童性を意味している。そして新しい児童性の提示とは夢や憧憬を持ちながらも現代に生きる人間としての作家が、現実との対決の末に仮構するものであろう」といっている。

(2) 鳥越信　「星の牧場」　50・6・20発行　日本児童文学別冊・現代日本児童文学作品論所収

(3) 庄野英二　「我が家のコツテイジ」　47・2・25　愛のくさり（五二頁）

(4) 同右　「木苺」　同右　同右　（一八九頁）

(5) 同　「自筆年譜」　49・4　講談社文庫本「ロッテルダムの灯」巻末

(6) 同右　「ロビンソン・クルーソーとお化の世界」　47・2・25　愛のくさり（一九三頁）

(7) 同右　「父母の家」　同右　同右　（二八頁）

(8) 同右　「茉莉花の少女」33・11「ロッテルダムの灯」（七四頁）

(9) 同右　「カトレア」　32・9　同右（七一頁）

なお、引用した本は一九六七年初版「理論社の愛蔵版」の第二十三刷（一九七四）による。